



Title	「牡丹花の伝弟子」伊予屋宗珀
Author(s)	工藤, 隆彰
Citation	国語国文研究, 146, 28-42
Issue Date	2015-06
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88985
Type	article
File Information	kudoh_146_p28-42.pdf



[Instructions for use](#)

「牡丹花的伝弟子」伊予屋宗珀

工藤隆彰

一 はじめに

宗珀は肖柏の弟子で、古今伝授を受けたとされる堺の連歌作者である。島津忠夫氏は、肖柏在世時に堺の連歌の中心となつて活躍した門弟の一人に、この宗珀を数えている⁽¹⁾。ただし、島津氏が肖柏の最も主要な門弟としているのは、肖柏の同宿で、その一周忌追善の会の和歌や発句を三条西実隆に求めた重吟である。そして重吟没後の天文年間頃、堺の連歌の主要人物となつていた宗訊に焦点を絞つて島津氏の論は進められているが、宗珀については特に言及がない。

木藤才蔵氏も、肖柏の門弟とされている人物達を列挙するなかで宗訊を最も大きな存在としており、それに続き宗全、そして重吟とともに宗珀を挙げている。木藤氏は宗珀に関して実隆との交流などにも言及しているが、宗訊についての記述と比べると、やはり内容

は少ない。

これらの研究を承けて、『俳文学大辞典』⁽³⁾には宗珀について以下のように立項されている。

宗珀そうほう 連歌作者。生没年未詳。天文四(一五三五)・二・二一以前没(「再昌草」)。津田宗達の父。堺の町人。伊予屋。重吟と並ぶ肖柏の高弟。肖柏から古今伝授を受ける。永正二二年(二五一五)十一月一〇日の「何路百韻」から大永四年(二五二四)五月一日の「何路百韻」に肖柏と一座。大永四年四月、実隆の高野山参詣の道しるべを行い(「高野参詣日記」)、同年六月には周桂と富士一見のため駿河国へ下向(「実隆公記」)。肖柏没後は実隆と交渉をもち、天文三年七月一〇日、実隆に宗祇三三回追善千句連歌の発句を所望。

右の記述に見える津田宗達は、天王寺屋という屋号を持つ堺の豪商であり、堺の茶の湯の発達に大きく貢献した茶人。織田信長・豊臣秀吉の茶頭として千利休・今井宗久とともに活動した津田宗及の

父である。その宗達の「父」とあるように、宗伯はこれまで津田宗伯（宗伯とも）と同一人物と考えられてきた。

津田宗伯は、茶の湯の祖に位置づけられている珠光の門下の茶人であったと伝えられている。『茶道辞典』⁽⁴⁾、『原色茶道大辞典』⁽⁵⁾、『角川茶道大事典』⁽⁶⁾などの茶道の辞典にも「津田宗伯」の項が設けられていて、いずれの解説にも肖柏から古今伝授を受けたとあり、なかにはその名について肖柏から「柏」の字を授かったとしているものもある。だが、『原色茶道大辞典』の新版として近年刊行された『茶道大辞典』⁽⁷⁾には、以下のように立項されている。

津田宗伯【つだそうはく】

生没年未詳。室町時代後期の堺の茶人。『清玩名物記』などに名があり、『烏鼠集四巻書』では天王寺屋宗伯が渡明する紫野道甘に依頼して調達したのが尼崎台であるとの伝承を載せる。津田宗達の父と見られてきたが、その所持した名物道具がほとんど宗達へ渡っていないので、一族ではあっても父ではなかったらしい。またその所持名物は、その後引拙所持とされる名物とよく重なるため、同一人物とする指摘がある。なお同じ時期の堺に、天文四年（一五三五）に没した伊予屋宗珀という町人の有力連歌師がいた。牡丹花肖柏より古今伝授を受け、三条西実隆とも交流があった。これも同一人物だった可能性があり、今後の研究がまたれる。

旧版の『原色茶道大辞典』と比較すると、この『茶道大辞典』では名前の表記が「宗伯」から「宗伯」に、その生没年が嘉吉四年―大永七年（一四四四―一五二七）から未詳に修正されており、さらに

宗達の父とされることにも否定的である。しかしながら、連歌作者の「宗珀」と同一人物とする説については、断定的な記述から改められてはいるものの、未だその可能性を残す形になっている。

このような認識の嚆矢は、おそらく『堺市史』⁽⁸⁾の以下の記述にあると思われる。

津田宗伯は堺の茶人で、屋号を天王寺屋と称した。茶湯を珠光に学び、(茶事談、茶人系伝全集)亦牡丹花肖柏より古今伝授を受けた。(明翰抄)

しかし、文中で示されている典拠を確認すると、この『堺市史』の記述には疑問が持たれる。

まず、『明翰抄』には「宗伯。同(筆者注、「肖柏門弟」)。則古今肖柏方伝授」とあるのみで、津田氏または天王寺屋の出身であると記されていない。この『明翰抄』は、古筆了佐の弟子で晩年には権威的な古筆家となった藤本箕山(一六二六―一七〇四)によって、承応元年(一六五二)に編まれたものである。しかし、箕山はその後、『明翰抄』に二度の増補重改を施しており、その結果貞享五年(一六八八)に『顕伝明名録』⁽⁹⁾が成立している。この『顕伝明名録』は人名が頭字で類字分けされており、その「宗」の部には既に木藤氏も言及しているように「(宗)珀 牡丹花的伝弟子。堺連歌師。伊予屋。古今伝授」とある。これを『明翰抄』の記述と比較すると、肖柏から伝授を受けた「宗伯」の表記が「(宗)珀」と改められ、さらに新たな情報として「伊予屋」という屋号が示されていることがわかる。その一方で、『明翰抄』と同様に津田氏または天王寺屋であるという記述はないのである。

さらに、宝暦十年（一七六〇）刊行の『茶事談』を見ても、茶人の系図のなかに珠光の門人の一人として「津田宗伯 左海天王寺屋」¹²と示されているのみで、肖柏の門弟であったことや古今伝授を受けたことについての記述はない。同様に、天保八年（一八三七）刊行の『茶人系伝全集』も、「津田宗伯 住沙界天王寺屋」¹³とするのみである。

このように、『堺市史』が典拠として示している資料のなかには、肖柏の弟子で古今伝授を受けた連歌作者の「宗珀」と、珠光の弟子であった茶人の「宗伯」を同一人物とする内容は存在しない。「宗珀」と「宗伯」を同一視する『堺市史』の記述の根拠は不明である。

それにもかかわらず、『堺市史』以降に著された連歌や茶の湯、堺の商人についての論考で、「宗珀」と「宗伯」を同一人物として扱っているものは数多い。そのなかで、戸田勝久氏は『堺市史』が肖柏の門人に宗伯を挙げていることを示しながら、茶と禪に関わりの深い津田氏の祖である宗伯が堺伝授を受けていたことは「肖柏の茶といふ点で見逃すことができない」とする。さらに、宗伯を堺が生んだ初期の茶の湯者であり文化の種を蒔いた人物と位置づけて、そこに肖柏が与えた影響も想定している。また、矢野環氏はその詳細が明らかになっていない茶人である引拙について、名物記における道具とその所有者の情報から宗伯と同一人物とする見解を示しているが、その論も「宗珀」と「宗伯」を同一人物としつつ展開されているものである。¹⁵

しかし、私見では連歌作者の「宗珀」と茶人の「宗伯」はそれぞれ別人で、従来の認識は改められるべきであると考えている。本稿

ではそれを示すとともに、『顕伝明名録』でただ一人「牡丹花的伝弟子」、つまり牡丹花（肖柏）の正統な弟子とされながらも、従来あまり注目されてこなかった宗珀について論じようと思う。

二 実隆周辺における活動と命日

堺の人物であること以外の宗珀の素性については、『顕伝明名録』などに見える「伊予屋」という号から、連歌によって生計を立てた専門連歌師ではなく商業を生業とする一般の連歌作者であったと推測されるのみである。その具体的な活動を示している資料は乏しいが、永正・大永年間に肖柏と一座したものを中心とする連歌の張行や、三条西実隆との交流の記録を通して、僅かながら知ることができ。

いずれも実隆によって記された資料として、『実隆公記』、『高野詣真名記』、『高野参詣日記（高野山道の記）』、『再昌草』から、宗珀の名が見える部分を以下に掲出する。¹⁶

『実隆公記』

大永四年（一五二四）

四月七日 及晚晴、周桂來、芋公事々一昨日有申旨、派兵返

事申之、宗碩來、宗白堺者、唐墨一挺持來、

五月十七日 根來扇實相院、可傳達之由申遣宗珀了、

六月一日 宗碩・周桂・宗珀對面、周桂・宗珀明日下向駿州、

扇下品物共遣之、

大永五年（一五二五）

五月廿五日 宗珀自堺一昨日上洛、雁一持來、對談、賜盃了

六月一日 來賀人々在之、飯川山城・道堅・宗碩・等連・周

桂・宗牧・宗珀、各勸一盞、

大永六年（一五二六）

五月十九日 宗碩・周桂・宗珀來、勸一盞

大永七年（一五二七）

六月七日 宗珀有狀、朱折敷一_{云々}流到來、周桂留守之間、先預

置之、

同 十二日 周桂自三井寺上洛、宗珀狀見之、朱折敷五百疋_{云々}、

然者可為如何哉、先何篇可預置之由命之

七月廿一日 宗珀所望題・哥等書之遺周桂、々々他行、宗瑮預置

_{云々}

同 十日 抑朱折敷代周桂調法、自泉堺予手跡所望者樽代兩

人送之、以之可渡宗珀、如何之由昨日内々談藤次

郎_{云々}此事雖不可然、當時之事也、任周桂所存之由、

今日返答了

大永八年（一五二八）

四月三日 周桂・宗瑮詠草持來、宗珀來、天野一荷・荒卷二

携之、賜盃雜談、

同 廿四日 周桂來、一昨日短冊各可一見之由申之、遣了、抑

夢庵月忌張行經文懷昏宗珀取之下向_{云々}

享祿四年（一五三一）

五月廿七日 宗珀所望外題五、

六月十五日 宗珀并宗仲返事今日遣之、斷洒落、

『高野詣真名記』

大永四年（一五二四）

四月廿一日 今日金 以周桂遣宗白、高野路物事申付之、

同 廿六日 途中於佐野宗白精進齋奔走、黄昏程着堺光明院、

同 廿七日 高野路次事、又黃金可遣之由仰宗白之處、不可及

其儀、今度悉皆無煩沙汰之由申之、不可思議事也、

『高野參詣日記』

大永四年（一五二四）

四月廿二日 高野に參詣の事思ひ立て、宗珀といふ物をしるべ

とたのみて、まかりたち侍り、

同 廿六日 さのと云所の、すこし道よりは入たるかたへ、宗

珀しるべして、ひるのやすみに、かいつ物などと、

のへたるも、めづらかになん、

『再昌草』

大永四年（一五二四）六月

六月二日、周桂法師、富士見にくだり侍しに、

戲言に

かへりこん日をば勘定せらるべし 結計（事歎）

なしなる道にあらねば

同、宗珀につかはし侍し

ふじのねはさもこそあらめおもひいでよ わけし

高野の雲風の空

大永七年（一五二七）七月

宗珀法師百首題所望、無鬼して廿二日書つか
はすとて、さいつ比朱折敷秘計の事あり、い
まだ申も付ざる事を申て、周桂がもとへ戯云
折敷こそをしとめたるかゆへなきに 御たびをさ
へに遅く出して

天文四年（一五三五）二月

同廿一日、宗珀法師追善千句発句、堺よりこ
ひしに
待つらん人を待ける花もなし

同追善、周桂法師張行 予高野詣引せし事を思へる也
花やしる道しるべせし峯の雲

まず、『実隆公記』大永四年（一五二四）四月七日の条から、宗珀（白）が唐墨一挺を携えて実隆のもとを訪れたことがわかる。これが『実隆公記』における宗珀の初出で、実隆との最初の顔合わせだったようである。この翌日には幸遵房が来訪していて、実隆の天王寺への参詣が十七日と決定されている。幸遵房は、参詣の旅中で実隆が歓待を受けた堺南庄の光明院に黄金一両を遣わす際の仲介もしている人物で、参詣の準備に動いていたことが窺われる。

同じく大永四年に記された『高野参詣日記』によれば、この参詣は「四月の比、住吉・天王寺にまうづべき心ざし有て」企画されたという。当初の予定であった十七日は雨が降ったため延期されたが、結果として四月十九日から五月三日に渡って、住吉と天王寺に高野

を加えて巡ることとなった。この旅行を実隆が漢文体の日記として記録したのが『高野詣真名記』、さらに後日旅中の歌や発句なども含めて一つの紀行文としてまとめたのが『高野参詣日記』である。先に掲げた通り、その両方に宗珀（白）の名が見えていて、宗珀が実隆の高野への参詣に際して案内を務めたことがわかる。

既に触れたように、宗珀は高野詣に先立つ四月七日に実隆のもとを訪れている。そして同時に、実隆の参詣に随伴した周桂や、旅中に肖柏を交えて開かれた張行で宗珀・周桂とともに連衆となった宗碩なども来訪していることが注目される。直接日記に書かれてはいないが、宗珀達の実隆訪問は参詣についての打ち合わせを兼ねていて、それを踏まえて実隆は翌日に幸遵房と予定を詰めたと考えられることができるのではないだろうか。

実隆と宗珀の交流の端緒は、この高野詣にあったと考えられる。そして、『実隆公記』には、その後の二人の交流も記されている。高野詣の直後、宗珀は周桂とともに富士見の紀行へ出発するが、その際に実隆は二人に狂歌を送っている。それ以降、宗珀の名は周桂とともに見えることが多いが、時には単独で実隆を訪れていることもある。肖柏一周忌の前日である大永八年（一五二八）四月三日にも、実隆が宗珀に盃を下して雑談したことが記されている。

しかし、同二十四日に肖柏月忌張行の経文懐紙を受け取って下向した後、『実隆公記』に宗珀の名はほとんど見えなくなる。『実隆公記』には享祿から天文にかけて数カ月に渡る欠落が散在するため、断言はできないが、肖柏の没後には実隆と宗珀の直接的な交流は乏しくなっていたようである。

この他に、『実隆公記』享祿四年（一五三二）八月十日の条に「出家宗柏」とあることから、この年に宗柏が得度したとされることがある。しかし、この箇所の前後は「井上又五郎（郎）自濃州有状、出家宗柏云々、八代集外題事申□」となっていて、「宗柏」とは濃州の井上又五郎という人物が出家して名乗った号であることが窺える。宗柏については『再昌草』の大永年間の記事に「宗柏法師」とあり、享祿以前に既に法体となつてゐることが知られるため、享祿四年に出家して宗柏と名乗つた井上又五郎が別人であることは明らかである。

また、『再昌草』の享祿五年の記事に「宗栢法師、仰木より文おこせて、昔爐辺の張行事など申て」とあるが、同年の『実隆公記』十二月十四日条に「井上又五郎自仰木有状、白壁一籠送之、不亡旧音信、爲悦々々」、同十六日条に「宗栢返事□□筆十管遣之」とある。このように『再昌草』と『実隆公記』の両方に、仰木から実隆と連絡をとつてゐる同時期の記事があることから、この「宗栢法師」も井上又五郎のことと考えられる。

さらに、『再昌草』天文三年（一五三四）の記事に

宗祇法師三十三回忌千句すべしとて、堺より宗白といふ者
申せし発句

七月十日書遣之

秋の夜のながきを夢の名こりかな

とあることについて、先に触れた木藤氏による言及等の先行研究では、これを宗栢による所望としている。しかし高野詣以降、実隆は名前の表記を「宗栢」で統一している。さらに「堺より宗白といふ

者申せし発句」という書き方は、『再昌草』に既に名前が出てゐる宗栢に対して用いるには不自然なものである。したがつてこの「宗白」も宗栢とは別人で、天文三年に実隆が初めて接触した人物であると考えられる。

さて、前掲の『再昌草』天文四年の記事から、宗栢は同年二月二十一日以前に没したとされている。しかし、既に鶴崎裕雄氏が指摘しているように、慶安三年（一六五〇）に刊行された『泉州龍山二師遺藁』に取められてゐる大林宗套が詠んだ以下の偈から、宗栢が没した日付を明確に知ることができるとする。

天文歲舎丁未正月二十有一者、廻松屋宗栢居士一十三回諱
之辰也。爰有和歌風月諸士一詠一吟。各述追懷矣。余
亦綴野偈一篇、書以投靈前云。

曾絶塵縁過一生。幾人今日最関情。松風涙落兩行雨。吹作
十三微上声。

大林宗套は臨濟宗の僧で、天文五年（一五三六）に大徳寺九十世となつた人物である。大徳寺は一休宗純や養叟宗頤の進出によつて堺の豪商・茶人達の帰依を得ており、大林宗套も武野紹鷗や津田宗及の参禅を受けた。右の偈が取められてゐる『泉州龍山二師遺藁』は紹鷗の孫である宗朝が編集した大林宗套・笑嶺宗訴の語録で、大林宗套が紹鷗や宗及に与えたものも含めて多くの偈が集められてゐる。

右の偈によれば「天文歲舎丁未正月二十有一」、つまり天文十六年正月二十一日に十三回忌が行われていることから、「松屋宗栢」の没年は天文四年ということになる。これは『再昌草』の宗栢追善の記

事の年次と合致するため、連歌作者の宗伯が天文四年正月二十一日に没し、松屋という道号で葬られたことが知られるのである。『再昌草』の記事の内容とあわせると、堺の人々から宗伯を追善するための発句を求められた実隆は、宗伯の初月忌である二月二十一日に「待つらん人を待ける花もなし」と詠み、それによつて宗伯追善の千句が催された、という経緯が推測される。

宗伯の命日に言及してきたが、ここで津田宗伯の命日についても触れておく。宗伯は、大永七年（一五二七）四月八日に八十五歳で没したとされることがある。²⁰しかし、これは肖柏の命日についての誤伝と全く同じものであることには注意すべきであろう。

肖柏の命日は、『実隆公記』大永七年四月十二日の条に「宗瑠來、夢庵去四日入滅之由、自堺申之云々」、翌月四日の条に「肖柏月忌始」とあることから、大永七年四月四日で間違いない。しかし、『茶道系伝全集』などの後代の茶書には、その日付を四月「八日」と誤って伝えていっているものが散見されるのである。

この誤伝が広まった原因の一つに、堺に関する地誌で貞享元年（一六八四）に刊行された『堺鑑』が考えられる。『堺鑑』に見える肖柏についての記事の前半は、寛文四年（一六六四）に刊行された深草元政『扶桑隱逸伝』をほぼ転写したもので、命日と享年について「大永七年丁亥四月八日卒、年八十五」とある。しかし、『扶桑隱逸伝』は肖柏の逝去について「大永七年四月卒、年八十五」とするのみで、日付は示していない。「八日」というのは、『堺鑑』で追加された記述なのである。この誤伝が『堺鑑』から始まったのかは不明だが、少なくとも誤伝の伝播には影響を与えていると考えられる。

津田宗伯の命日を大永七年四月八日、享年を八十五歳とする説は、「宗伯」と「宗伯」の同一視に加えて、宗伯の師である肖柏についての誤伝が混同されたものではないだろうか。『茶道大辞典』が生没年未詳としているように、現時点では津田宗伯の生没年は不明としておくべきであろう。

三 「伊予屋」の号について

宗伯の号について、大林宗套の偈には「松屋」とあり、先に触れた『顕伝明名録』などには「伊予屋」とある。この「松屋」は一見屋号に思えるため混同されやすいが、大徳寺一一世住持である春屋宗園の「春屋」などと同様に道号であり、生前に屋号として名乗っていたものが「伊予屋」であったと考えられる。しかし、これは津田宗伯の「天王寺屋」という屋号とは一致しないため、伊予屋（松屋）宗伯と津田宗伯は別人ということになる。

ところで、伊予屋という屋号を持つ堺の人物に、伊予屋良干がいる。良干は慶長九年（一六〇四）に徳川家康に召し出されて糸割符年寄を仰せつけられた商人の一人である。糸割符は白糸割符商人のことで、当時はまだ多くを輸入に頼っていた生糸を独占的に購入・販売することを幕府から許可された特権商人を意味し、糸割符年寄はその中心となつた商人達である。糸割符制度はこの慶長九年に始まり、最初は堺・京都・長崎の商人にのみ認められていた。

泉澄一氏は良干ら最初期の堺の糸割符年寄達について、家康に取り立てられて急に豪商になつたのではなく、糸割符制度の確立以前、

信長や秀吉による統治の時代から活躍していた商家であったと推測している。しかし、当時の堺の有力な商人達が数多く登場する『天王寺屋会記』や『宗湛日記』には、糸割符年寄となった人物達の名前はほとんど見えないことから、泉氏は糸割符年寄達が天王寺屋・神屋といった豊臣政権下で重んじられた豪商とは距離を置いていた商人達であったという見解を示している。その一人である伊予屋良干が宗珀と同族か否かを示す資料はないが、可能性は考慮してもよいであろう。

宗珀を「伊予屋」とすることについて、従来の研究は、『顕伝明名録』に依拠していると思われるが、この他にも資料はある。まず、『清水宗川聞書』⁽²⁶⁾に、

一、古今箱伝受は、牡丹花を本とす。牡丹花は宗祇より伝受也。

是は本伝受なれ共、此末を箱伝受と云。箱ばかりわたし来る故也。此末は今花の下、津守は住吉之社家、堺伝受等也。牡丹花より伊予屋宗白、その次に等恵、其次に紅粉屋の宗柳也。此宗白・等恵・宗柳、三代に諸方につたへたる流派、あまた有也。

とあることが井上宗雄氏によつて指摘されている。この『清水宗川聞書』は歌人の清水宗川（一六一四—一六九七）の話を書き留めた体裁の歌学書であり、内容は述者の宗川からの話、宗川がその師である飛鳥井雅章などから聞いた話、及び記者の見識で構成されていると考えられている。

さらに、富山奏氏が『高野参詣日記』の伝本の一つとして紹介している出口常順氏藏本『天王寺詣記』には、その本文に登場する宗珀に関わる以下の内容の付箋が貼られている。⁽²⁶⁾

ちゝり奉勅 伊予宗珀

落葉かきに親子いでゝのいさかいはちゝり成けり唐崎の松

此哥をよめる故、ちゝり宗珀と云。住堺。

右於住吉聞書

見林書

この付箋は『天王寺詣記』の所蔵者であった儒学者・国史学者の松下見林（一六三七—一七〇三）による記録で、実隆の旅程の一部でもあった住吉における聞書として、堺に住む「伊予宗珀」が詠んだ一首の狂歌が記されている。これは『天王寺詣記』の本文に名が見えている宗珀についての情報として付されたものと考えられ、そのなかで「伊予（屋）」という宗珀の号が示されているのである。狂歌の内容について付言すると、「ちゝり」は松かさ、松ぼっくりのことと、「ちゝりなりけり」は「父、理なりけり」にかけている。

この宗珀の狂歌は有名であったようで、寛文六年（一六六六）に刊行された『古今夷曲集』にも入集している。ただし「落葉かく親子のものゝいさかひはちちりなりとぞ住吉の松」という形になっていて、見林の付箋とは異同が目立つ。この『古今夷曲集』には宗祇や肖柏、宗訊の狂歌も入集していて、宗珀は作者目録で宗訊とともに和泉堺の連歌師として扱われている。

さらに、この狂歌は『古今夷曲集』に先立つ元和九年（一六三三）に成立した「醒睡笑」のなかに、⁽²⁶⁾

親子諍ひ子が僻事といふ題出でたれば、徹書記、

落葉かきに親子いでての争ひはちちりなりけりからさきの

松

と、正徹に仮託されて記されている。見林の付箋にある狂歌は、『古

今夷曲集』よりもこの『醒睡笑』に見える形に近い。

なお、『醒睡笑』の作者である安楽庵策伝に関する資料として、寛永十年（一六三三）前後に策伝が友人達と交わした贈答等を取めた『策伝和尚送答控』が残っているが、そのなかに「宗珀」という人物との狂歌を含む贈答が複数ある。このことについて中村幸彦氏は「宗珀といえ、古今夷曲集」に和泉堺の連歌師と見える人で、宗不などと共に策伝には古い知人ではなかろうか」としているが、鈴木棠三氏が策伝及びその友人たちの残した記録を調べた上で、『策伝和尚送答控』に見える宗珀は「三条に住んだ唐物屋」らしく、件の狂歌の作者で堺の人物とされる宗珀とは別人と判断している。³⁰⁾

四 茶人「天王寺屋宗珀」との同一人物説の検討

さて、伊予屋という屋号に関連する問題として、改めて「宗珀」と「宗伯」の同一人物説について考えてみたい。

先に触れた矢野環氏の説の論旨は、天文年間の情報を主体とする『清玩名物記』を室町期の名物記における重要資料と位置付け、その内容を基準として、『清玩名物記』を若干さかのぼる時代の京都の名物を記した『往古道具値段付』や、珠光の時代から寛永に至るまでの茶道具名物を所蔵者ごとに再編成して記述した『松屋名物集』などの記録を比較すると、宗伯所持とされる道具と引拙所持とされる道具に一致が多く見出される、ということが骨子になっている。

この『松屋名物集』は「伊日宗伯」という人名をあげて、その下に「竹雀（物候）・柳燕（雨中之味）・檜柴（茶人）・茄子（同）・セイコ（峰玉）・菓子（趙昌）・無

籓（花入）』という七つの所持物を記している。このうち、「檜柴（檜柴肩衝）」は『往古道具値段付』で、「茄子（松本茄子）」は『清玩名物記』で天王寺屋宗伯所持とされており、これに「菓子（趙昌菓子）」と「無籓（無無）」を加えた計四種の道具が他の文献で天王寺屋宗伯所持とされていることから、矢野氏は「伊日宗伯」を天王寺屋宗伯と同一人物とする。その過程で、「伊日」の表記を「伊与」の誤りと解して、伊日宗伯＝伊与（予）屋宗珀＝天王寺屋宗伯としているのである。

『松屋名物集』は、奈良の茶匠松屋土門氏に伝来した名物集である。列挙されている人名には、慶安五年（一六五二）没の松屋久重の在世時を下るものがほとんど見えないことから、久重が『松屋会記』などの松屋伝来の記録類や、世上に流布していた名物記などを基として編集したものと推定されている³²⁾。しかし、矢野氏はこの『松屋名物集』について、孤本でありながらもその奥書から原本ではなく幾度も転写を経たものであることがわかり、加えてかなり書写が悪く乱丁も疑われ、同一人物についての重複もあるなど問題が多いとしている³³⁾。

このような資料を用いて展開された説に対して、まず「伊日宗伯」が本当に伊与（予）屋宗珀を指しているのかという疑問が持たれる。「伊」という字がつく屋号には、「伊予屋」以外にも「伊丹屋」「伊勢屋」などがある。転写が繰り返されている上に書写の質も劣悪な資料の「伊日」という記述を、「伊与」の誤写と断言することは難しいのではないだろうか。

さらに、『松屋名物集』は宗達やその弟とされる道叱・宗閑らに「天

王寺屋」と冠して、宗及らも加えて一族がまとまって記されていることが注目される。「伊日宗伯」が宗達らと同じ天王寺屋一族であつたならば、宗伯だけ「伊日」という屋号で一族と離れた部分に示されているのは不自然であろう。このことから、「伊日宗伯」は松屋において、天王寺屋一族と認識されていなかつたと考えられる。

そもそも、松屋の収集した情報が常に正しいものであつたと言えらるだろうか。矢野氏は「松屋名物集」の内容について、「明らかに『清玩名物記』の異本を使用しており、これまで該書(筆者注、「松屋名物集」)の貴重な情報として引用されてきた大部分が本書に拠るものであることが解る」としている。しかし、そうであるとすれば「清玩名物記」に「茄子(松本茄子)」の所持者として見える「天王寺屋宗伯」という人名が、そのまま「松屋名物集」に反映せずに「伊日宗伯」となつてしまつていることに對して疑問が持たれる。この表記の相違は、「松屋名物集」の編集に用いられた『清玩名物記』の異本」に既に問題があつたか、もしくは「松屋名物集」が「茄子」を宗伯所持とした典拠は別に存在して、そちらに問題があつたことに起因するのではないだろうか。

「宗珀・宗伯・宗柏」という名が連衆に見える連歌の記録を調べると、早くは文明八年(一四七六)から、最も時代が下るものでは寛永九年(一六三二)のものがある。本稿でも同名の別人の存在に触れてきたが、それとあわせても中世後期から近世初期にかけて多数の「宗珀・宗伯・宗柏」がいたことは明らかである。時代は少し下るが、伊予屋と同じく近世初期に糸割符貿易に携わつた堺の豪商で、寛文六年(一六六六)に連歌会所を設立している伊丹屋宗伯という

人物さえる。

このように、多くの人々が連歌や茶の湯に興じるとともに、似通つた素性を持つ同名の人物達が存在した時代には、道具とその所持者に関する情報の伝播、そしてそれを元にした記録が後代に編集される過程で、同名の別人との混同が生じ、誤つた情報が茶書に反映された可能性を考えるべきではないだろうか。それゆえに、「松屋名物集」の内容に基づく伊日宗伯≡伊与(予)屋宗珀≡天王寺屋宗伯という見解は、決定的なものとは言い難いように思われる。

これまで見てきたように、連歌作者の宗珀と茶人の宗伯が同一人物であることを明示する資料はなく、伝えられているそれぞれの屋号も一致していない。さらに、連歌作者の宗珀の名前の表記に注目すると、宗珀と出会つた直後の記録である『実隆公記』の初出の一例及び『高野詣真名記』を除いた実隆の著述、宗珀が肖柏と一座している連歌の記録の大部分、後述する古今伝授の系譜を記した資料など、その多くは「宗珀」とされている。それに対して、茶人の宗伯の名は「清玩名物記」「往古道具値段付」「烏鼠集四卷書」などの資料で「宗伯」あるいは「宗柏」と記されており、「宗珀」と記されているものは見当たらないのである。

これらのことから、伊予屋宗珀と天王寺屋(津田)宗伯は別人と考えられるのではないだろうか。

五 おわりに

—— 後人の宗珀に対する認識 ——

先述の通り、宗珀は天文四年正月二十一日に没した。『実隆公記』はこの年の記録を欠いているが、『再昌草』には堺から求められて宗珀追善千句の発句を詠んだことが記されている。加えて、親しかつた周桂も自ら宗珀追善の張行を開いたことがわかり、その発句が併記されている。それに対して実隆は「予高野詣誘引せし事を思へる也」と注記しており、周桂を伴って宗珀に案内された高野詣のことを思い出していたようである。また、既に島津氏の指摘がある通り、宗訊の句集にも宗珀の三回忌に詠んだという句が見える。³⁶⁾そして、大林宗套の偈に「爰有和歌風月諸士、一詠一吟各述追懷矣」とあるように、没後十年以上が経ってもなおその死を悼んで人々が集まり、各々一詠一吟を以て追懷したということから、宗珀が堺の文壇で大きな存在であったことが窺われる。

それにもかかわらず、従来の研究で宗珀にあまり目が向けられてこなかったのは、自身の著作をはじめとする直接的な資料が伝存していないことに理由があるだろう。堺の連歌壇の中心的存在であったと考えられている宗訊には、句集の『堺宗訊付句発句』、宗訊句集『潮信句集』や歌学書の『千種抄』のみならず、連歌撰集の『六家連歌抄』、また古今伝授についても『古聞』の自筆加証奥書本や切紙類など、関連する資料が多くある。それに対して宗珀にはほとんど何も残っておらず、わずかに尊経閣文庫蔵本『両度聞書』の奥書や、

国立国会図書館蔵本『古聞』の押紙³⁸⁾にその名が見える程度である。

しかし、宗珀は古今伝授の系譜のなかで確かにその名を残している。『明翰抄』には肖柏に始まる堺伝授の系図として「堺古今伝授之図」が掲げられており、肖柏の門弟に宗訊と宗珀の二人が示されている。そこには宗訊以降に何も記されていないのに対して、宗珀以降は等恵、宗柳と系図が続いていき、さらにその後の門流も描かれている。また、先述の通り『顕伝明名録』には宗珀について「牡丹花的伝弟子」とあるが、この記述は宗訊や重吟にはないものである。古筆家であることに加えて「色道大鏡」の著者として有名であり、その博識さが知られている箕山は、肖柏の学統としては宗珀及びその門流を最も重要視していたと考えられる。

また、先に触れた通り『清水宗川聞書』にも、堺伝授については「宗白・等恵・宗柳、三代に諸方につたへたる流派、あまた有也」と、やはり肖柏から宗珀に伝えられた学統の展開が示されている。さらに他の部分でも、「堯孝は野州に伝受之人なれ共、是を箱伝受之家とす。是を堺之牡丹花に伝。是、一流也。夫より宗珀・等恵・宗柳（下略）」と、再び肖柏の門流として宗珀以下の名が挙げられている。『清水宗川聞書』には堺伝授に留まらず、当代に至るまでの古今伝授の濫觴に関する豊富な知識が反映されている。そのなかで、肖柏からの伝授についての記述には、宗訊やその他の門弟のことは何も言及されていないのに対して、宗珀への伝授とその拡がりが見え返り示されていることは注目すべきであろう。

この他に宗珀の名が見える古今伝授の系譜の資料を挙げると、まづ北村季吟が元禄十三年（一七〇〇）に柳沢吉保に与えた『師伝之

血脉二通』がある。⁽³⁹⁾ 季吟は東本願寺の門跡である従高から伝授を受けていて、『師伝之血脉二通』とあるように師である従高に伝えられていた二つの学統を別紙で示している。一つは宗祇から肖柏、宗珀、等惠、宗柳、祐心、光従、従高と伝授された系統。もう一つは、永正三年（一五〇六）に宗訓と共に肖柏から伝授を受けた真存より伝わったものと、宗祇から宗牧、乗阿と伝わったものの二流を継いでいた切臨から、従高に伝授された系統である。

そして、平間長雅の『神国和歌師資相伝正統血脉道統之譜』⁽⁴⁰⁾。長雅は松永貞徳から伝授を受けた望月長孝から伝授を受けていた。それに加えて、長雅は朴津天神（堺天神）の梅松院に百年の間秘されていた「堺牡丹花箱伝授、古今集之秘書、切紙系図等三通」が入った伝授の箱を開封したという。そのため『神国和歌師資相伝正統血脉道統之譜』には、宗祇以降二つに枝分かれた系譜が示されている。一つは実隆をはじめとする三条西家の人々、幽斎、貞徳、長孝、長雅という系統、もう一つは肖柏から宗珀、等惠、宗柳、空盛（注記曰く、朴津天神社僧吉祥院中興、権大僧都法印）及び盛誉（同松南院三世、権律師法印）、そして長雅という系統である。この空盛と盛誉については、『顕伝明名録』にも「自宗柳古今伝授」とある。

天神の社内には別当の天台宗常楽寺があり、梅松院はその衆坊の一つだった。同じく常楽寺の衆坊だった吉祥院の空盛と松南院の盛誉によって梅松院に蔵された伝授箱は、元禄十三年（一七〇〇）に住持の盛澄法印が入寂した時、盛澄の甥である西脇六左衛門利房の手に渡った。盛澄は先述の伊丹屋宗伯（西脇利広）の弟で、利房は宗伯の息子である。宗伯が連歌会所を建てたのも、この天神の社内

であった。⁽⁴¹⁾

伊丹屋親子は連歌を嗜んでいたものの、和歌には通じていなかったという。そのため、利房は受け継いだ箱を開くことを憚っていたところ、既に伝授を受けていた長雅がその箱を借りて被見したのである。しかし借りている間に利房が亡くなってしまったため、箱はその後息子の利清に返却されたという。このような経緯で肖柏流の伝授箱を開封した長雅は、そのなかにあった肖柏、宗珀から空盛及び盛誉に至るまでの系図に自分の名を加えて、『神国和歌師資相伝正統血脉道統之譜』の一流を記したのであろう。

ここまで、肖柏から宗珀への古今伝授を示すいくつかの資料を挙げてきた。それらを残した箕山、宗川、季吟は、すべて松永貞徳の門人である。そして長雅も、貞徳の主要な門人の一人である長孝から伝授を受けていたことは既に述べた。宗珀は、貞徳を一つの源流とする近世初期の地下文壇において、肖柏から古今伝授を受けた門弟の筆頭として広く認知されていたのではないだろうか。

注

- (1) 島津忠夫『島津忠夫著作集』第二卷（和泉書院、二〇〇三年）終章第一節「連歌壇から俳壇へ」（一九七〇年初出）参照。
- (2) 木藤才蔵『連歌史論考 上』（増補改訂版、明治書院、一九九三年）第九章第二節「肖柏の伝記」（一九七一年初出）、同、連歌史論考 下』第十一章第二節「堺の連歌と主要作家」参照。
- (3) 『俳文学大辞典 普及版』（角川学芸出版、二〇〇八年）※親版

- 一九九五年)。
- (4) 桑田忠親編『茶道辞典』(訂正版、東京堂、一九六一年)。
- (5) 井口海仙・末宗廣・永島福太郎監修『原色茶道大辞典』(淡交社、一九七五年)。
- (6) 林屋辰三郎他編『角川茶道大事典』(角川書店、一九九〇年)。
- (7) 筒井紘一編、井口海仙・末宗広・永島福太郎監修『茶道大辞典』(淡交社、二〇一〇年)。
- (8) 堺市役所編『堺市史 第七巻 別編』(堺市役所、一九三〇年)一三四頁参照。
- (9) 引用は、塙保己一編『統群書類従 第三十一輯下 雑部』(訂正版、統群書類従完成会、一九五八年)に拠る。
- (10) 野間光辰『近世芸苑譜』(八木書店、一九八五年)第一部第一章「藤本箕山の生涯」(一九三九年初出)参照。
- (11) 引用は、『覆刻日本古典全集 顕傳明名録』(現代思潮社、一九七八年)に拠る。
- (12) 引用は、早稲田大学古典籍総合データベース『茶事談』(請求記号・ヲ〇九 〇〇〇五七)に拠る。
- (13) 引用は、今治市河野美術館蔵本(国文学研究資料館マイクロ請求記号・七三一五九三一)の紙焼資料に拠る。
- (14) 戸田勝久『武野紹鷗研究』(中央公論美術出版、一九六九年)第四章「中世芸文の世界」(一九六三年初出)参照。
- (15) 矢野環『紹鷗所持名物道具の全容——天王寺屋宗伯所持道具とともに——』(戸田勝久先生喜寿記念論集刊行会編『武野紹鷗 わびの創造』所収。思文閣出版、二〇〇九年)参照。
- (16) 『実隆公記』、『高野詣真名記』、『高野参詣日記』の引用は、『実隆公記』(統群書類従完成会)に拠る。『再昌草』の引用は、『私家集大成』CD化委員会編『新編私家集大成 CD-ROM版』(エムワイ企画、二〇〇八年)に拠り、濁点は私に補った。
- (17) 速水佐恵子「十六世紀における堺商人の動向——天王寺屋をめぐって——」(『史論』第一二号、一九六四年一月)参照。
- (18) 鶴崎裕雄「堺、塩風呂と連歌——三条西実隆「高野山道の記」に見る都市の一面」(『ヒストリア』第一〇〇号、一九八三年九月)参照。
- (19) 引用は、沢庵和尚刊行会編『沢庵和尚全集 巻六』(巧芸社、一九二八年)に拠る。
- (20) 千宗室等編『茶道古典全集 第七巻』(淡交社)所収『天王寺屋会記』解題、注(6)、注(14)など。
- (21) 引用は、古板地誌研究会編『古板地誌叢書二三 堺鑑』(芸林舎、一九七一年)に拠る。
- (22) 引用は、島原泰雄編『深草元政集 三』(古典文庫、一九七七年)に拠る。
- (23) 泉澄一『堺と博多 戦国の豪商』(創元社、一九七六年)第七章第三節「糸割符商人と鉄砲鍛冶」参照。
- (24) 引用は、久保田啓一・鈴木淳・揖斐高・鈴木亮校注『歌論歌学集成』第十六巻(三弥井書店、二〇〇四年)に拠る。
- (25) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期』(改訂新版、明治書院、一九八七年)第二章第八節「祇門の人々」参照。

(26) 富山奏「天王寺詣記」と「高野参詣日記」(『殖生野国文』

第四号、一九七四年二月)参照。狂歌の部分については、附載されている影印によって一部改めた箇所がある。

(27) 引用は、佐竹昭広他編『新日本古典文学大系』六一(岩波書店、一九九三年)に拠る。

(28) 引用は、鈴木棠三校注『醒睡笑』上(岩波書店、一九八六年)に拠る。

(29) 『中村幸彦著述集 第十二巻』(中央公論社、一九八三年)第八章付二「安楽庵策伝とその周囲」(一九五四年初出)参照。

(30) 鈴木棠三『安楽庵策伝ノート』(東京堂出版、一九七三年)第一部第六章「茶人安楽庵」、第二部第三章「策伝の贈答歌」参照。

(31) 引用は、『茶道古典全集 第十二巻』(淡交社)に拠る。

(32) 注(31)所収「松屋名物集」解題参照。

(33) 矢野環「名物記の生成構造——実見と編集のはざま——」第二部「筒井紘一編『茶道学大系第十巻 茶の古典』所収。淡交社、二〇〇一年)参照。

(34) 泉澄一「近世初頭の堺商人・伊丹屋宗伯とその一族」(『ヒストリア』第六六号、一九七五年三月)参照。泉氏は、宗伯は平野屋の出身で、伊丹屋に養嗣子として入家したと推測している。寛文十一年(一六七二)に没したというので、連歌会所の設立は晩年のことである。

(35) 『清玩名物記』は注(33)『茶道学大系第十巻 茶の古典』、『往古道具値段付』は白嵯頭成編『顕岑院本一 茶道望月集』(思

文閣出版、二〇一三年)、『烏鼠集四巻書』は裏千家今日庵文庫茶道文化研究編集委員会編『茶道文化研究』第一輯(裏千家今日庵文庫、一九七四年)参照。

(36) 『堺宗訊付句発句』(大阪天満宮文庫蔵、れ三一七)に、『宗珀法師第三廻忌会』に「緑そふかげやつかのま春の糸(糸)の右に「花イ」、左に「草敷」と注記」とある。また、『宗訊句集』(同、丙一九)にも同様の詞書で「みどりそふかげやつかのま春の草」とある。

(37) 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『斯道文庫書誌叢刊之七 古今集注釈書伝本書目』(勉誠出版、二〇〇七年)によると、尊経閣文庫蔵本「両度聞書」は江戸中期の写本で三冊本。第三冊の末尾に「三冊書写事令免許/重阿者也/夢老(肖柏)」、「此秘本三冊 先師宗祇尊老聞書也/夢庵居士夢御等閑之仁宗把法師/依連々懇望可免書寫旨重以/任被申置而已/享録第四九月十三日/宗珀(花押)」とあり、第一・二冊末にも享録四年(一五三二)の宗珀の奥書があるという。

(38) 平沢五郎・川上新一郎・石神秀美「資料紹介 財団法人前田育徳会尊経閣文庫蔵『天文十五年宗訊奥書』古今和歌集聞書(古聞)』並びに校勘記 校異篇」(『斯道文庫論集』第二三号、一九八九年)によると、国立国会図書館蔵本「古聞」(外題)は江戸初期の写本で六冊本。他本にはない二枚の押紙があり、第六冊仮名序の後にある一枚に、

古今集抄古注二巻八伝来之秘抄。題号ナシ文明十六年
臘月六日始之。但採文明十六上下之二字号文六抄

物名二十卷ハ文明十八年二月六日又始之^{云々}

仮名序六儀之注ハ祇公之書ヲ写スト也ト／アリテ私聞書ヲ被加タリ以之コレヲ思フニ／牡丹花抄出トミヘタリ宗珀宗訊兩人ノ問ミ／肖柏演説在之タル抄物ニヤ累代伝来之ノ五卷抄古聞ト云三卷聞書ニハ少く相違ノ事／アリ見合テ了解スヘシ／長□亭とあるという。

(39) 柳沢文庫蔵本（国文学研究資料館マイクロ請求記号…三五〇

一一八一一五）参照。

(40) 国立国会図書館蔵本（請求記号…二二八―七四）参照。なお

注（41）篋田将樹氏の論考によると、『堺市史料』第百五卷所収本に谷安重に付与された宝永二年（一七〇五）二月付の長雅奥書を持つ一本があるという。

(41) 篋田将樹「平間長雅の箱伝受と『堺浦天満宮法楽百首和歌』」

『上方文芸研究』第五号、二〇〇八年）参照。

（くどう たかあき・北海道大学大学院博士後期課程）